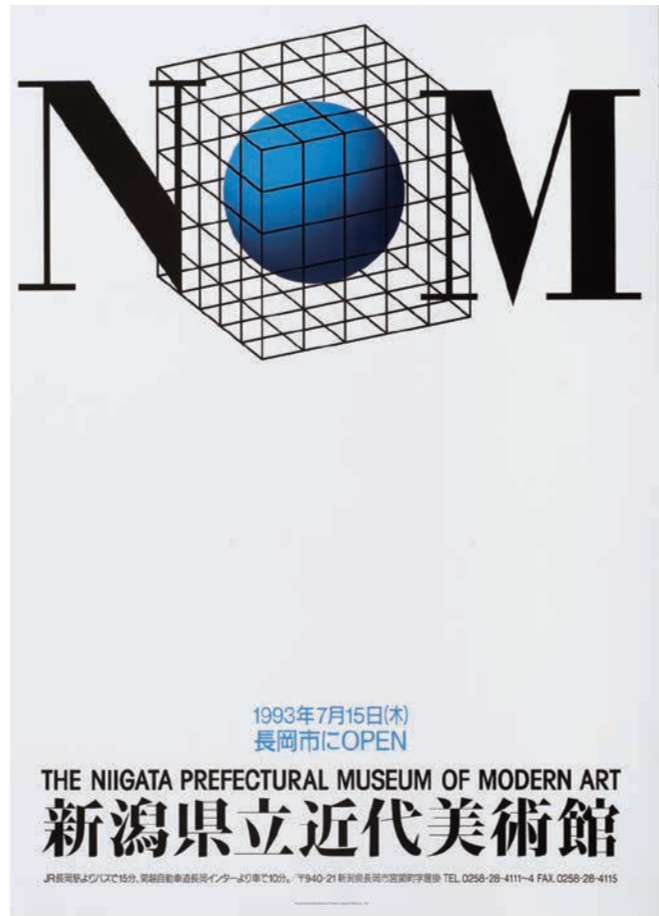


雪椿通信

vol. 56

開館30周年特集号



亀倉雄策〈新潟県立近代美術館 開館告知ポスター〉1992年

KINBI
30TH
Anniv.
BANBI
20TH
Anniv.

2023

望郷の画家 橋本龍美
—神も、庶民も、バケモノも

橋本龍美(1928～2016)は、現在の新潟県加茂市で生まれ育ち、創画会の会員として活躍した日本画家です。

当館で所蔵している作品は一点のみ。《風之唄》(1981年)という三曲屏風で、五体のお地藏さんが並んでいる絵です。描かれているのは、夜の闇に浮かび上がるお地藏さんとそれに化したキツネ、のみならず妖怪、食い散らかした魚の骨やがらなどのカニの甲羅、鳥、虫、枯葉、赤ん坊のおもちゃ、松ぼっくりに栗、ほの光るほおずき、口をあけたカラスウリ、秋の花々、魚、いたち……。中央のお地藏さんの胸元にいるのは赤ん坊?それとも人形?少し怖いような雰囲気もある絵で、描かれているものはとても多く、そして、一つ一つが少しずつ不思議でちょっと不気味です。そして、ここにたくさん描かれたものたちを一つずつ発見するたびに、絵の中に物語が生まれてきます。そしてそれは、見る人によって異なるストーリーだったりします。不気味だけでなくどこかユーモラスなもの、この作品の魅力です。

龍美が幼い頃、毎夜おばあさんから聞いたお化けの夜噺、それと日頃目にするお地藏さんとが合体してできたのがこの《風之唄》なのです。図らずもそこに見えてくるのは、人間の、目に見えないものに対する畏怖の念と、龍美の、ひいては日本民族の宗教観です。

龍美の創作の源泉は、殆どすべてが故郷・加茂での幼い頃に体験した原風景です。《風之唄》では夜



橋本龍美《望郷四季》1986年 個人蔵

噺に登場するバケモノと路傍のお地藏さんですが、1986年作の《望郷四季》では、加茂の自然とここに暮らす昭和初期の庶民の有様が描かれます。稼業に勤しむ職人、洗濯場で談笑するおばちゃんたち、外で思い切り遊ぶ子供たち、通りを行く物売り、山奥に跳ねるウサギ、そしてキツネの嫁入り行列……と、ここにもまた多くのものが、一つ一つ愛おしむように描かれています。図版で確認するのは難しいかもしれませんが、実際の作品の前ではやはりいくつもの発見ができるでしょう。

さらに、この《望郷四季》には、龍美が愛する伝統的な日本美術の要素をいくつも見出すことができます。まず町並みを俯瞰して描く洛中洛外図的な要素。ものの形を模式的装飾的に整理して描く琳派的要素。物語を説明的に描いたり家の中の様子を覗き見せる絵巻物的要素。そして、四つの季節を一枚の絵の中に封じ込める日月山水図の要素です。山の稜線で画面を区切って雪景色を登場させたり、同様に空を装飾的に区切ってキツネの嫁入り行列を描いたり、異なる空間を、理屈を超えてさりと共存させてしまうのも、日本美術の得意分野かもしれません。お地藏さんや見世物小屋を描いた他の作品でも、仏画や仏像の造形を取り入れたりしており、独学によって画家になった龍美が何を師としていたかがわかります。

橋本龍美展は、没後初めてだけでなく、龍美の画業の全貌を見渡せる初めての展覧会となります。この機会に龍美の作品の魅力を堪能していただければと思います。

(専門学芸員 宮下東子)

企画展「望郷の画家 橋本龍美展—神も、庶民も、バケモノも」
4月15日(土)～6月4日(日)

橋本龍美《風之唄》1981年 当館蔵

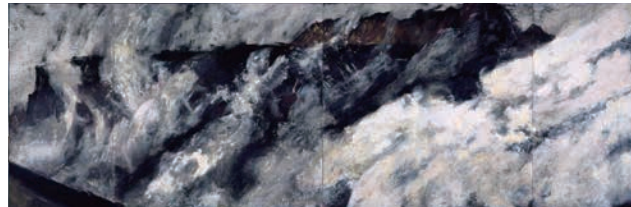
コレクション展
「没後50年 横山操展」に寄せて

本年4月に没後50年を迎えた新潟県出身の日本画家、横山操(1920～1973)の画業を回顧するコレクション展を開催します。

横山操は西蒲原郡吉田村(現在の燕市)に生まれ、画家を志して上京、1940年川端龍子の主宰する青龍展に初入選します。しかし程なく召集、終戦と同時に現在のカザフスタン共和国に抑留され、その後10年間のブランクを経て、1950年に青龍展への復帰を果たしました。その後の操は、従来の日本画の枠に囚われない画題・画面サイズ・技法により多くの意欲作・話題作を発表し、一躍、戦後日本画壇の寵児となります。1962年の青龍社脱退後は無所属で活躍し、多摩美術大学教授として後進の指導にもあたりましたが、脳卒中で倒れて右半身不随となり、1973年に53歳の若さで亡くなりました。

操をめぐるのは、近年いくつかの重要な出来事がありました。2009年には、燕市の実家に長らく保管されていた“幻”の初期作品群が同市に寄贈されました。2016年、夫人と息女が相次いで死去し、アトリエに残されていた作品や遺品が多摩美術大学ほかに寄贈され、2018年三鷹市美術ギャラリーにおいてこれら豊富な資料群を紹介する「横山操展 アトリエより」を開催。2020～21年には富山県水墨美術館と新潟市新津美術館で「生誕100年記念 日本画家・横山操—その画業と知られざる顔—」が開催され、燕市所蔵の戦前作品や横山家旧蔵の小品が多数紹介されました。こうした動向によって、従来知られていなかった画家の側面にも光が当てられるようになったのです。

当館では、1997年の「横山操・加山又造展」、

横山操《新山》1958年
長岡市立中央図書館蔵

1999～2000年の「横山操展」(東京国立近代美術館との共同企画)など多くの機会に操の画業を紹介してきました。このたび、開館30周年を記念して開催する本展では、コレクション展示室全室を使い、当館所蔵の操作品全68点を紹介します。

なかでも、旅先で遭遇した桜島の大噴火を描いた《炎々桜島》(1956年、幅454cm)や、巨大な画面サイズを批判され、青龍社脱退のきっかけとなった《十勝岳》(1962年、幅639cm)、五輪開催に向け東京の景観が変貌していく様子を捉えた《高速四号線》(1964年、幅480cm)などの大画面作品は、彼の真骨頂を示すものです。また、故郷新潟の風景を描く《雪峡》(1963年)、《ふるさと》(1966年)などの諸作や、色紙大の小画面に描かれた『中央論』表紙絵全36点(1966～68年)には、その後の作風の深化や画題の広がりを見てとることができます。

さらに今回は、燕市、長岡市、新潟市美術館、雪梁舎美術館からも作品をお借りして特別展示を行います。青龍展初入選作《渡船場》(1940年、燕市教育委員会蔵)や、8年ぶりの公開となる昭和新年を描いた大作《新山》(1958年、長岡市立中央図書館蔵)なども見逃せません。

いたる所で絵具が亀裂を生じ、荒々しい絵肌を晒す横山操の作品からは、敢えて日本画材を用いながら同時代的な芸術表現を求めた画家の切実さが伝わってきます。制作から半世紀以上を経過しながら、今なおアクチュアリティを持ち続ける彼の作品に、あらためて熱い眼差しを向けていただければ幸いです。

(主任学芸員 長嶋圭哉)

第1期コレクション展
「没後50年 横山操展」
4月11日(火)～6月18日(日)

2023年度の展覧会から

まずは企画展からご紹介します。「華麗なるパリベル・エポック展 —フランス・モダン・ポスター—」(7/1～8/27)では、19世紀末から20世紀初頭にかけての豊かな良き時代、すなわち、「ベル・エポック」と呼ばれる時期に花開いたフランスのポスター芸術をご覧ください。ロートレックやミュシャらによるポスターから、当時のパリの息づかいを感じてください。

次に、「ベルギーと日本 —光をえがき、命をかたどる—」(9/16～11/12)では、ベルギーに戦前に留学した画家の太田喜二郎、児島虎次郎、そして新潟出身の彫刻家の武石弘三郎の三人を、彼らが日本へもたらしたベルギー美術やその影響にも着目しながら紹介します。

最後に「尼崎市コレクション 白髪一雄」(1/13～2/25)では、天井から吊るしたロープにぶら下がり、足を使って描く「フットペインティング」を生み出した白髪一雄を、兵庫県尼崎市のコレクションにより紹介します。身体をダイナミックに使った躍動感あふれる作品を前に皆さん圧倒されるに違いありません。

コレクション展も開館30周年を記念し、魅力的なテーマと作品を揃えてお届けします。第3期(9/12～12/17)に開催する「異国に渡った芸術家たち」では、画技を磨くため、あるいは活躍の地を求めて憧れの異国へ渡った芸術家たちを取り上げます。佐伯祐三《広告塔》や藤田嗣治《私の夢》など、当館の名品も展示しますのでお楽しみに。

同時期に開催する「三芳悌吉 絵本の仕事—科学の眼差し—」では、新潟で幼・少年期を過ごした画家、三芳悌吉の作品の中から絵本の挿絵を展示します。幼い頃から生物に興味を持ち、大学病院で標本スケッチや解剖図の制作に携わったこともある三芳は、卓抜した観察眼と描写力を持っていました。『川とさかなたち』をはじめ、三芳の仕事を通して、その

編集部からのひとこと

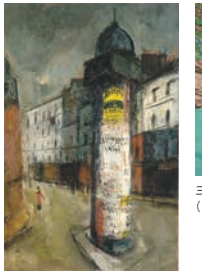
この春、マスクの着用が個人の判断に委ねられ、私たちはウイルス禍以前の日常を取り戻しつつあります。そんな中、開館30周年という節目の年を迎える当館。初心に立ち返り、これからの新しい時代を築いていきたいと思います。人々に「想像」を促し、人々の「出会い」に資する場をめざして。

(主任学芸員 長嶋圭哉)

科学的な眼差しに触れてください。

最後に、第4期(12/26～4/7予定)には「反戦への思い」と題し、所蔵品の中から反戦をテーマにした作品を展示します。第二次大戦終結から80年近く経とうとする今なお、世界から争いがなくなることはありません。美術を通して、戦争の悲惨さや平和について考える機会としていただければ幸いです。

30周年を迎える近代美術館。今年度も多彩なラインナップで皆様のお越しをお待ちしております！
(主任学芸員 飯島沙耶子)

アンリ・ド・トゥールーズ＝ロートレック
《ディヴァン・ジャポネ》1892年
〔「華麗なるパリ」ベル・エポック展—フランス・モダン・ポスター—より〕児島虎次郎《和服を着たベルギーの少女》
1910年 高梁市成羽美術館蔵
〔「ベルギーと日本—光をえがき、命をかたどる—」より〕佐伯祐三《広告塔》1927年
〔「異国に渡った芸術家たち」より〕三芳悌吉《川とさかなたち 原画2》1983年
〔「三芳悌吉 絵本の仕事—科学の眼差し—」より〕

新潟県立近代美術館だより 雪椿通信 第56号

編集・発行 THE NIIGATA PREFECTURAL MUSEUM OF MODERN ART

新潟県立近代美術館

〒940-2083 新潟県長岡市千秋3丁目278-14

TEL0258-28-4111代 FAX0258-28-4115

https://kinbi.pref.niigata.lg.jp/

Twitter @niigata_kinbi Instagram niigata_kinbi

制作・印刷 吉原印刷株式会社

〒940-1164 新潟県長岡市南陽2丁目 949-13

リデザイン 長岡造形大学 太田朝陽、畔上祐香、大浦有夏、田中雄大

発行日 2023年4月18日

特集1

新潟県立近代美術館開館30周年
特別寄稿① 新潟県立近代美術館のこと

新潟大学 人文社会・教育学系教授
(新潟県立近代美術館協議会 会長)

丹治 嘉彦

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

美術館、この言葉には強い憧れがありました。私が育った福島市に県立美術館ができたのは1984年のことで、高校在学中まで美術館で芸術作品を鑑賞するには、他県に足を延ばす以外ありませんでした。高校を卒業し、上京してからは、都内近郊の美術館に足を運び、意中の作品を展覧会開催中何度も観ることができ、あるいは学芸員の作品解説に立ち会える等、自分にとって身近に美術館が存在することは何ものにも代え難い喜びでした。

しかしながら、新型コロナが全国に広がり今年で約3年の月日を数え、この間に行動等の制限がかかり、アートを鑑賞・体験したい私を含めた市民にとって、美術館や関連施設に足を運べない状況が生じたことは、あまりにも過酷な時間となりました。日常において展覧会に期待をもって足を運び、作品と対面することや、作品を前に対話を行いながら楽しむことができないのは、日々の生活が色味を感じないグレーな世界に変容した気がしてなりませんでした。

2020年4月、初めて緊急事態宣言のもと外出自粛要請・イベント開催自粛が出されました。それは、感染拡大を阻止するための予防的な措置でしたが、それによって人が移動することができなくなってしまい、好きな時に好きな場所に移動する自由を奪うものでした。これはある意味、人と人とが生身のコミュニケーションをとれなくなったことをあらわしています。元京都大学総長・山極壽一氏がある講演会において、「人類は身体と身体が共鳴する中で信頼を獲得してきた。特に言葉がそれぞれを橋渡ししてきたが、実はそれ以前音楽等のコミュニケーションをそれに付け加えることで複雑で質の高い社会を



■丹治嘉彦氏プロフィール
1987年3月、東京藝術大学大学院芸術学研究科修了。2011年11月より現職。「地域における芸術活動と実践」「三次元空間における芸術表現」を研究テーマに、アート・デザイン・美術教育等を核としたアートプロジェクトを中国や全国各地で多面的に展開している。

丹治氏の印象に残る当館企画展
左:「インサイド／アウトサイドー日本現代彫刻の8人ー」1998年
右:「会田誠展 ま、Still Alive?てこーゆーこと」2015年(ワークショップ「MONUMENT FOR NOTHING II」)

作り上げた」と述べています。現代において人として信用を得ること、また、信頼を獲得することは、言葉という共通の概念によって人と人との関係がどう場を形成させてきましたが、それだけではこのコロナ禍における不自由な社会に向き合うことは不可能だと思います。山極氏が述べる音楽等が内包しているコミュニケーションとは、想像性を獲得することで関係性が広がることに言い換えられます。美術も当然ながら同軸上に存在し、絵を描くことやものをつくること、そしてそれらを鑑賞しあうこと等は、唯一無二でそれに値します。このような想像する行為こそが、社会を豊かにする原動力に成り得ると考えます。

新型コロナの出現によって社会情勢が大きく変化し中、美術館の使命を考えるなら、この想像的な時間や空間を如何にして提供できるかが問われるのではないのでしょうか。

新潟県立近代美術館は開館以来、様々な企画展示等を広く県民に提供してきました。美術館に足を運ぶことで、様々なイメージが体に染み込み、そこから生きる希望を獲得できると考えます。これは美術館を訪れた人それぞれが少なからず感じたはずで、す。しかしながら、このコロナ禍を経験した後は、それだけにとどまらず、感情が溢れるほどの物語を県民皆で紡ぎ出すことによって、新たな県立美術館の姿が見えてくると考えます。皆の新潟県立近代美術館、万代島美術館として……。

特集2

新潟県立近代美術館開館30周年
特別寄稿②「展覧会の絵」を聴きながら

株式会社日本設計 執行役員フェロー
古賀 大

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

新潟県立近代美術館開館30周年、おめでとうございます。これまで運営に携わられた皆様、美術館を支えて下さった美術愛好家の皆様にお祝い申し上げます。

この美術館は1990年春に敷地調査で訪れて以来、私にとって最も思い出深い建築の一つです。設計の大きな特徴は美術館の主要な機能をほぼ平屋建てとしたことです。これにより、来館者が外の景色を眺め、それぞれの思いを反芻しながら次の展示室に導かれる、その道行きをデザインしています。組曲「展覧会の絵」は親友の遺作展で見た10枚の絵に触発されてムソルグスキーが作曲した名曲です。その絵と絵の間をつなぐプロムナードという小曲はおそらく展示室から窓外を見た心の風景ではないかと思ひます。そういう思いを鑑賞する方々が抱くことのできる美術館にしたいと思ひました。平屋にすることで、展覧会準備の際に美術品が段差無く移動できる利点もあります。すべての展示室と収蔵庫、搬出入口は幅4メートルの広い廊下で接続し、大きな作品を安全に運べることもまた設計上の要点です。

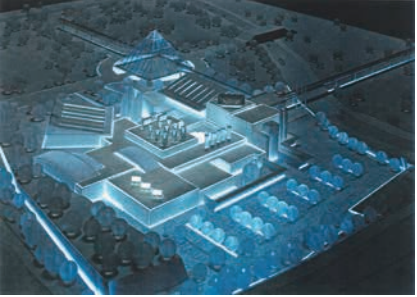
美術館東側は盛土を行い信濃川堤防の上から建物屋上を一体の庭園とすることも重要なコンセプトです。桜堤を散歩しながら寄り道のできるランドスケープデザインとなっています。植物と土で覆うということは、夏の暑さ、冬の寒さから建物や美術品を自然の断熱材で包むことになり、そのような自然の摂理に基づいた設計を心がけました。この造園計画はいくつかの管理区画を跨ぐので実はたいへん難しく、新潟県、長岡市、国土交通省の方々の協力があってやっと実現できたものです。あの頃の苦労が何事もなくあったように、今ではボブラの樹がたくましく成長した姿を見ると本当に嬉しくなります。

お世話になった方々の中でも、学芸員の小見秀男さんのことは忘れられません。美術館が開館した直後に、「4メートル道路(裏方の廊下をそう呼んでいました)は常に整理整頓して広く使えるようにする。

設計意図をゼツタイに守るからオレたちに任せろ。」と言われたことが思い出されます。「ここで学んだことを次に活かせ!」と激励を受けたことも強く印象に残っています。当時まだ駆け出しだった私ですが、その至らぬことには目を尖らせることなく、将来の仕事で一層発展させるように促されたものと思ひます。それから10年ほどして、長崎県美術館の設計を始めた頃のことです。「海辺に建つ美術館なら塩害の影響がないように考える必要がある。千葉県立美術館の米田さんに来て意見を聞いてくる」といよ。」と紹介され、ここで受けた助言は設計段階で大いに役立ちました。その後、長崎県美術館の館長に米田耕司先生が就任され、深いご縁を感じました。

音楽が大好きで、いつも大らかで、エネルギーに人と人をつなげて下さる小見さんとの出会いは、その後の私の30年になくはならないものでした。昨年9月にご逝去されたとお聞きし、残念でなりません。ご冥福をお祈りいたします。

新潟県立近代美術館がこれからも県民の皆様に関し、美術を通して自らと出会うことのできる場、そして人と人が出会う場であり続けていただきたいと祈念しております。



建築設計競技時のコンセプト模型

■古賀大氏プロフィール
博士(学術)。1989年3月、東京藝術大学大学院美術研究科建築専攻修了。1989年4月、日本設計入社。1999年～2000年、文化庁派遣芸術家在外研修員。以来、美術館、博物館、教育施設をはじめ、歴史的建造物の保存再生、大規模な都心開発案件まで携わる。

特集3

新潟県立近代美術館開館30周年
近代美術館建設と開館の頃

1. 美術館の位置

1991年7月、長岡市宮関町字居掛278-14(現・千秋3丁目278-14)の地に新潟県立近代美術館の建設がはじまりました。住所に「字」とある通り、建設着工された頃、この地域にはハイブ長岡以外、コンビニひとつありませんでした。アトリウムも長岡造形大学も長岡リリックホールも日赤病院も、すべて当館の後に作られたのです。この頃の美術館勤務は、昼食を調達するのも一苦労でした。

2. 美術館の礎を作った前川誠郎館長

近代美術館開館のため招かれたのが前川誠郎館長(1920～2010)です。アルブレヒト・デューラー研究の世界的権威で、京都大学、九州大学、東京大学で教鞭をとり、1980年代には国立西洋美術館館長を務めました。その西洋美術館時代の1988年に日仏共同企画展として「ジャポニスム展」を開催しており、当館で収集方針の一つにジャポニスムを掲げたことにも、前川館長の強い意思が感じられます。

3. 近代美術館の象徴

新潟県立近代美術館にはその貌となる象徴的な作品があります。オーギュスト・ロダンの《カリアティードとアトラント》(1876年頃)です。ロダンがブリュッセルにおいて、まだ建築装飾の仕事に携わっていた時代に手懸けた作品の一つで、「ブリュッセルで見られるロダンの最も美しい作品」とも評されました。これを日本に運び、傷んだ部分を修復し、来館者を出迎えるエントランスホールに設置しました。1993年7月14日の開館記念式典では、当時の平山知事と前川館長による除幕式が行われています。

4. 近代美術館の開館

翌7月15日、かつて長岡市に存在した長岡現代美術館の所蔵品200点を日本中の美術館等から借用した「大光コレクション展」が柿落としとして開幕。海外展のような華やかさとは一線を画す開館記念展でしたが、開館を待ちわびた方々が連日訪れ、賑わいをみせました。

(万代島美術館館長 藤田裕彦)
※前当館学芸課長



1992年12月 美術館本体工事完了



初代館長 前川誠郎



《カリアティードとアトラント》除幕式



大光コレクション展会場



開館当初の美術館入口

特集4

新潟県立近代美術館開館30周年
関連イベントが目白押し

開館30周年を迎える今年、近代美術館を愛し支え続けてくださった皆様に感謝するとともに、美術館の原点を見つめ直し、次なる時代に向けて新たなスタートにつながる事業として、いくつかのイベントをご用意いたしました。

最も重要なものとして、美術館の核である「コレクション」に着目し、一年をかけてコレクション展示室で特別展示を行います。第2期では、当館の30年間の歩みを振り返り、開館準備時代の収蔵品第一号や当館の特徴である「大光コレクション」を一堂に紹介します。また周年を祝うイベントにも力を注いでいます。開館記念日である7月15日にはコレクション展を無料で開放します。7月15日～17日の三連休には記念品(缶バッジ、トートバッグ)をプレゼントするほか、三日間だけの「ボン・ボン・マルシェ」を開催し、古本や美術館図録を特別価格にて販売します。それ以外にも目白押しですので、ホームページ等でお知らせにご注目ください。

(専門学芸員 平石昌子)

記念ロゴマークについて

今年は当館が開館30年、分館である万代島美術館が開館20年であることを記念して、両館の愛称「キンビ(近代美術館)」「バンビ(万代島美術館)」をあしらったロゴマークを制作しました。本県出身のデザイナー五十嵐祐太さん(アドハウスパブリック)が「笑顔と数字を組み合わせたマークです。今までもこれからも美術館がたくさんの人をワクワクした気持ちにさせ、笑顔にさせる存在である様に」という思いをこめて作成してくれました。

表紙の作品

当館には春夏秋冬に合わせて使い分けている4色のロゴマークがあります(表紙は冬の青)。このような美術館は珍しいのではないのでしょうか。季節感を大切にする日本的かつ雪国の感性を思わせます。30年前、グラフィックデザイナー亀倉雄策(燕市出身)によって制作されました。自らの故郷に新しく設立される美術館に託した願い、そして希望が伝わってくるようです。

(専門学芸員 平石昌子)

亀倉雄策「新潟県立近代美術館 開館告知ポスター」1992年(第2期コレクション展「ニガタキンビ誕生の頃」(6/27～9/3)より)



岸田劉生《冬枯れの道路 原宿附近写生》1916年(第2期コレクション展「大光コレクション」(6/27～9/3)より)



竹内栖鳳《睡郷》1930年(第4期コレクション展「近代美術館の日本画の名品」(12/26～4/7予定)より)

